8・6ヒロシマへ！

全学連（斎藤郁真委員長） 書記局通信

2018年６月２日
No.512

Tel　03-3651-4861
mail_cn001@zengakuren.jp
http://www.zengakuren.jp/

全学連大会・公安襲撃事件 国賠訴訟（第６回）行われる！

５月31日、東京地裁429号法廷で全学連国賠訴訟・第６回口頭弁論が行われました。警視庁公安部とともに本事件の被告である東京都は、全学連大会襲撃を居直る『第３準備書面』と、襲撃の一部始終を撮影した動画データの提出拒否を主張する『意見書』で許しがたい主張を行っています。

東京都は、警視庁公安部が撮影した映像を所持していることを認めながらも、「中核派及び全学連の動向や活動実態を確認するとともに、本件会場付近に現れる可能性が相当程度あった中核派の指名手配者等を集会参加者の中から探索…、本件会場付近に現れる中核派の活動家を対象として行った目視による捜査活動において、目視による捜査活動に併せ、その補助的手段として撮影されたものにすぎない」と主張しています。あの暴行・襲撃が「目視による捜査活動の補助的手段」!?

ふざけるな！ 全学連が当日撮影した映像にも、会場に集まる学生たちに白昼公然と暴力をふるう公安警察の姿がはっきりと映っています。公安警察が撮影した映像には、より一層鮮明な暴行シーンが記録されていることは間違いありません。だからこそ、国家権力は絶対に証拠映像を提出できないのです。

日大生のメッカ＝水道橋駅に街宣登場！

裁判後に弁護士会館ロビーで総括集会

証拠映像をめぐっては、今年２月に弁護団が裁判所とともに警視庁に「証拠保全手続きの立ち入り」を行いましたが、警視庁公安部はこれを拒否しました。真実の隠蔽を許さない！ 星野文昭同志・大坂正明同志を奪還する闘いと一つです。

弁護団は公安警察の個人責任を問う『第４準備書面』を提出しました。終了後の総括集会で斎藤いくま全学連委員長は、「日大アメフト部をめぐる騒動の重要なポイントは、権力者の指示に従って相手選手に反則のタックルをかましたのは真面目な学生であって、モラルやマナーの欠如した悪意ある存在では決してなかったこと。本質は、権力と個人の関係の問題。戦争において、前線に行くのも他国民を殺す銃弾を生産するのも、自衛隊員による殺人に承認を与えるのもすべて私たちです。実際にそのような『仕事』を指示されたとき、私たちはどうするのか」「今の時代に学生自治会を甦らせ、権力者の理不尽に立ち向かう団結を大学につくりたい。全学連の運動がもっと強くあれば、日大アメフト部の学生は反則タックルをしなくてよかったはずだ」と語りました。

弁護士の森川文人さん、小竹広子さん、花澤俊之さんから今後の意気込みが語られました。国賠訴訟の次回、第７回口頭弁論は７月19日(午後３時、東京地裁429号法廷)です。大結集をお願いします！

＜全学連救対部･洞口朋子＞

斎藤いくま委員長のアピール!

本裁判が始まって、すでに随分な時間が経過しています。本来ならば私たちが提出した動画データにも写っているように、公安警察のみなさんが「公務」として、正々堂々と合法的に撮影したはずの動画データが提出されていれば効率よく真実が明らかにされていたはずでした。今に至るも自らが撮影した動画データの提出を拒み続ける東京都･公安警察の不誠実な態度を改めて弾劾します。

現警視総監･吉田尚正氏は警視庁ＨＰにて「正しく強く温かい警視庁」を目指す、と公言されています。本裁判において被告側がとっている態度がこの言葉にふさわしいと言えるのでしょうか。「汚く醜く卑怯な警視庁」の間違いではないでしょうか。

公安警察･東京都のこのような態度は彼らだけにとどまりません。今、新聞を見れば権力者による改ざんや隠蔽、自らの不正に対する開き直りが一大ニュースとなっています。最近では日大アメフト部の不正が多くの人の記憶に最も残っているでしょうか。私は、この社会の現状を不甲斐ない思いで見ています。なぜなら、こういった権力者の腐敗は当然彼ら自身に第一の責任があるわけですが、反面において彼らのやりたい放題を野放しにしてきた私たちの責任を問わない限り問題の解決は永遠に先延ばしだからです。一人の人間に過ぎない権力者の道徳のみを問題にして政治や組織の責任を丸投げにし、「良い権力者」が与えられることを口を空けて待ち続け、「悪い権力者」が与えられたときに文句を言うようでは問題は堂々巡りです。

日大アメフト部をめぐる騒動の重要なポイントは、権力者の指示に従って相手選手に反則のタックルをかましたのは真面目な学生であって、モラルやマナーの欠如した悪意ある存在では決してなかったということです。事の本質は、権力と個人の関係の問題なのです。戦争において、前線に行くのも他国民を殺す銃弾を生産するのも、自衛隊員による殺人に承認を与えるのもすべて私たちです。実際にそのような「仕事」を指示されたとき、私たちはどうするのか。ますます不安定化する朝鮮半島情勢があり、憲法改定が狙われているとき、このような問いかけは決していつか未来に迫られる決断ではありません。

私たち全学連は、今の時代に学生自治会を甦らせ、権力者の理不尽に立ち向かう団結を大学につくりたいと考えています。傲慢かもしれませんが、私は全学連の運動がもっと強くあれば、日大アメフト部の学生は反則タックルをしなくてよかったはずだと確信しています。

被告･東京都と公安警察の行動は結局のところ、権力者の横暴を守るためのさらなる横暴に他なりません。中立を旨とする裁判所が警察の捜査権に配慮する理由など本来ないはずです。動画データすら提出せず、裁判所の忖度を願うだけの被告に対して、法の裁きを求めます。　（了）